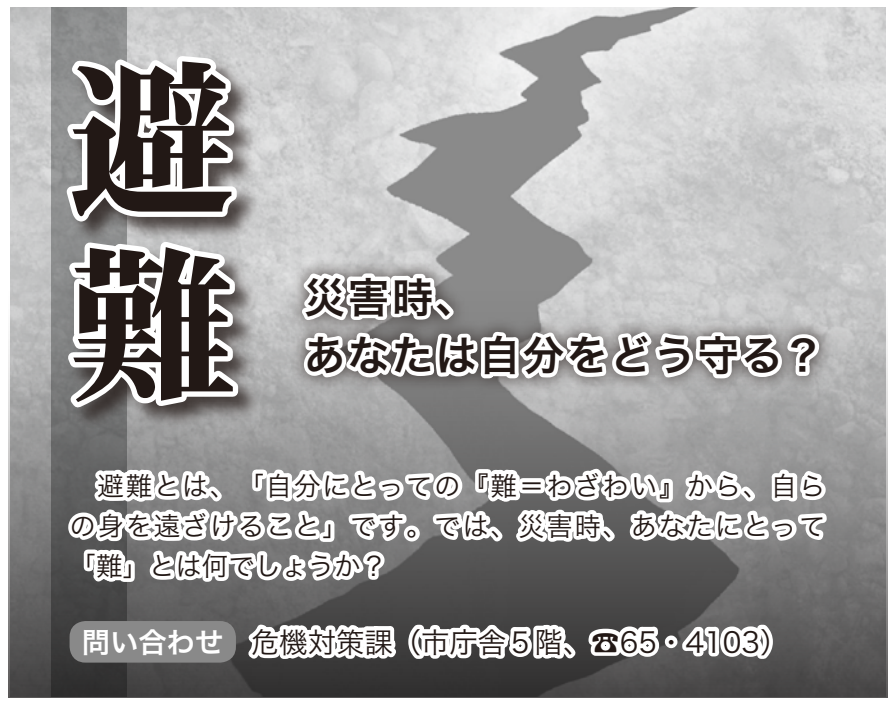


1 「避難」について考えてみる

災害というと、真っ先に地震を連想する人も多いと思いますが、近年、気象変動の影響により、全国各地で洪水や土砂災害などの被害が多発しています。

災害の種類によって、その影響も異なり、避難の方法も変わってきます。避難所に行くことだけが「避難」ではありません。一人ひとりが「自らの命は自らが守る」という意識で、さまざまな避難の選択肢の中から最適な方法を選ぶことが大切です。

まずは、ハザードマップを確認し災害に備える

避難所や浸水の想定を示している「ハザードマップ（おびひろ暮らしと防災ガイド）」で、自宅や職場などの浸水リスクを日ごろから把握しておきましょう。

市ホームページID.1002255

2 状況に応じて避難先を選択する

普段から、さまざまな選択肢を確認し、最も安全と思われる場所に避難しましょう。また、避難先が分散することは、新型コロナウイルス感染症の感染リスクがある状況において、避難所での密集や密接を避けるためにも効果的です。

「地震」の場合の避難

揺れで建物が大きな被害を受け、余震によって倒壊や損壊の恐れがある場合は、その場にとどまることは危険です。まずは身の安全を守る行動をとり、揺れが収まるのを待ってから避難しましょう。

冬場の場合

冬場で暖をとる手段がない場合は、暖がとれる場所に避難する必要があります。

「水害」の場合の避難

水害は地震と違い、突然発生しません。台風や大雨は天気予報である程度事前に予測できるので、災害に備える時間があります。

水害時の一番の危険は、水に流されてしまうことです。避難指示などが発令された場合は、より早く、水から離れる方向へ逃げましょう。

そのため、普段からテレビ・ラジオやインターネット・各種ＳＮＳなどで、帯広市からの避難情報などを受け取れるよう、複数の入手方法を確認しておくことが大切です。

「とどまる」ことも避難

無理に移動することが逆に危険な場合もあります。例えば、20～30センチ程度の浸水で歩いて移動できると思っても、水の下ではマンホールのふたが流されていたり、地面の凹凸が把握できずに転倒したりと危険です。

水害が発生する前に避難を完了することが最も大切ですが、浸水深が浅い場所では、影響を受けない上階などにとどまり安全を確保する「屋内安全確保」という方法もあります。自宅に必要な備えがあれば、ライフラインが停止しても在宅避難は可能です。

3 大切なのは「普段からの備え」

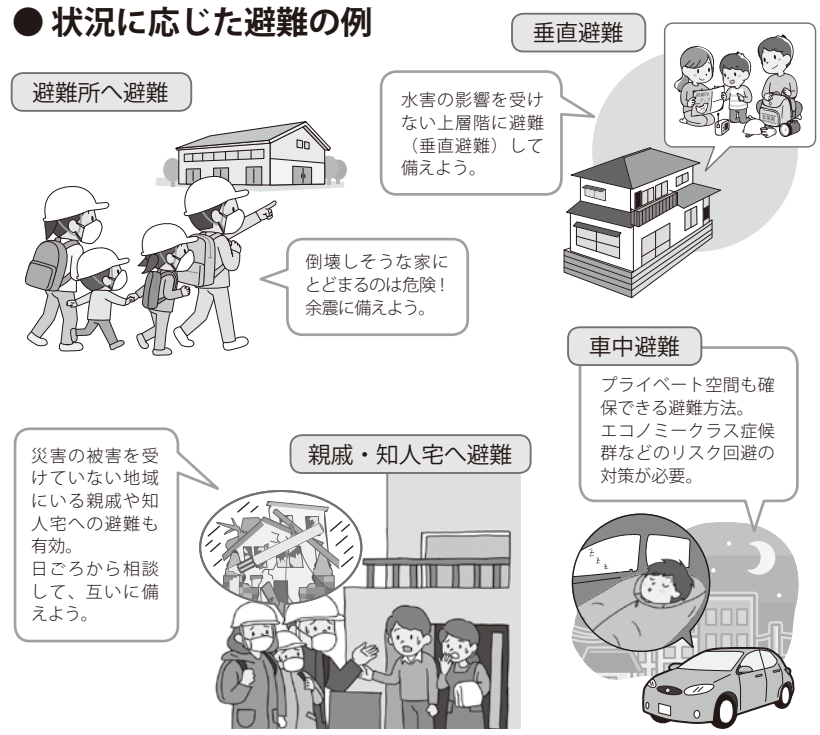
在宅避難で必要なのは、食料や水はもちろんのこと、北海道では冬の寒さをしのぐ備えも大事です。停電を想定して電池式の暖房器具や布団類、防寒着などを用意しておきましょう。

トイレ対策も忘れずに

排せつを我慢するために飲食を控えると、体力維持に必要なエネルギーを得られないほか、水分摂取を控えると熱中症やエコノミークラス症候群を招くリスクが高まるなど、健康への悪影響が心配されます。

便器や配管の破損や断水、停電などでトイレが使えなくなることも想定し、袋に用を足して凝固剤で固めて廃棄できる「し尿処理剤」を用意しておくことも大切です。

● 状況に応じた避難の例



災害情報を固定電話やＦＡＸなどへ配信します！

インターネット（ＳＮＳなど）が使えない人や視覚・聴覚に障害のある人などに、緊急性の高い気象情報や避難情報を自宅の固定電話やファクス、携帯電話などのメールに配信しています。

登録は無料（メールの受信はパケット料がかかります）です。

■主な配信情報

防災気象情報（大雨特別警報、記録的短時間大雨情報、土砂災害警戒情報など）
避難判断情報（高齢者等避難、避難指示など）
避難所情報（開設、閉所など）
国民保護情報（弾道ミサイル情報など）

■申し込み　電話で危機対策課へ。メールの場合は、✉bousai.obihiro-city@raiden3.ktaiwork.jpへ空メールを送信してください。

▲メールはこちらからも

「帯広市地域防災訓練」を行います

感染症対策を踏まえた避難所の設営などを体験する訓練を実施します。実際の避難所運営がどういうものか体験してみませんか。

日　　時：９月18日㈰、９時30分～12時30分
場　　所：よつ葉アリーナ十勝（大通北１）
対　　象：市民（小学生以下は保護者同伴）
定　　員：訓練参加150人、見学50人
申し込み：８月26日㈮までに、直接または電話で危機対策課へ。

災害時要援護者支援制度で地域を支えています　自宅で生活している高齢者や障害のある人などの避難に支援が必要な人たちの「避難時に介助や付き添いをしてほしい」といった情報を、支援体制が整っている地域に伝え、避難が必要になったら支援者が要援護者の元を訪れて避難の支援をする制度です。